

7月5日 年間第14主日

エゼ 2:2~5 IIコリ 12:7~10 マコ 6:1~6

1. マコ

v.3 「このように、人々はイエスにつまずいた。」

カトリック信者は普段“聖母マリアへの祈り”の中で、“主はあなたを選び、祝福し、あなたの子イエスも祝福されました”と唱えているので、このナザレの同郷人たちがイエスをマリアの息子と呼んだことに、別段違和感を感じないかもしれません。

しかし実は、ユダヤ人はその父の名に従って呼ばれるということが、律法によって厳しく命じられていたことに注目すると、このテキストの重要性が分かるのです。すでに父親が故人となっている場合も同様で、ただ父親が誰か分からない場合にだけ、母の名によって呼ばれたのです。

ユダヤ人はここで次のように言おうとしたのです。イエスはマリアの子で、私生児である。この背教の私生児は、その故郷で失脚させねばならない。そのためには先ず、この不名誉な呼び名で十分である。“マリアの息子イエス”、と。

福音書は私たちに、イエスが行われた多くの奇跡と不思議な業を通して、神の国が近づいたしるし(マタ 12:28)を読み取ることを求めているのです。それは信仰によってだけ可能なことであって、決して人間が神に証拠を見せろと要求することではありません(15:32)。

イエスは、ファリサイ派の人々の求めに対して、しるしを与えることを拒否されました(8:11-13)。しかし同時に奇跡と不思議な業が、神の国は近づいたという御自分の宣教に耳を傾ける人々にとっては、十分に理解できるはずのしるしであると見なしておられました。福音書の記事は、イエスが間違いなく御自分の数々の奇跡と不思議な業を、イザヤによって預言されていた主の日の到来のしるしであると理解しておられたことを示しています(マタ 11:2-6、ルカ 4:21)。

このマルコ福音書の並行記事である ルカ 4:22 以下 では、この不名誉な呼び名が“ヨセフの子”と修正されてはいますが、イエスを町の外へ追い出して殺そうとした(ルカ 4:29)という結末から判断して、同郷人たちがイエスにつまずいたことが分かります。

神はキリストによって世を御自分と和解させ(IIコリ 5:18-19)、御子を死者の中から復活させて(エフェ 1:20)主またメシアとされた(使 2:36)という神の国の福音を理解しない人にとっては、ただ福音書が語る“しるし”が理解できないだけではないのです。イエスにつまずく人は“キリストに敵対し”(マタ 12:30)、“キリストとその言葉を恥じる者”(8:38)となるという現実を、私たちは厳粛に受け止める必要があります。

2. IIコリ

使徒パウロには、その身に一つのとげ(病気)が与えられていました。彼はある手紙の中で、「わたしの身

には、あなたがたにとって試練ともなるようなことがあった」(ガラ4:14)とっています。使徒パウロはこれを自分が「思い上がることがないようにと、…… 与えられた」(v.7)と解釈しました。

人は本来、キリストの福音を学んだり、その宣教の一端を担うような働きをするときには、思い上がったりしないで、むしろ謙遜になるものです。ところが実際には福音を学ぶことを軽んじ、それ故に福音とは無関係な“人間の単なる善意や善行”に励むときには、無意識のうちに思い上がるようになるものです。いわゆる“外国伝道”の対象とされた我が国で、西欧のキリスト教の諸活動がそのような思い上がりを伴って行われて来たことを、心ある人は気づいていたというのは確かです。

カトリック教会も含めて、キリスト教諸派が伝道と称している活動の主な内容は、福音を真実に、より深く語ることでなく、実際には自派の組織を拡大することでありました。そのために教会は常に、社会的にも政治的にも強くなろうとして来ました。建前はどうかあれ、信者が聖伝と聖書によってキリストの福音を学んだり、信仰によって“神の国のしるし”を読み取るということは、事実上放置されて来たのです。

「神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように」(エフェ1:18)という願いが私たちの祈りとなるとき、初めて使徒パウロの言っている「わたしは弱いときにこそ強い」(v.10)という言葉が、生き返ることでしょう。

3. エゼ

「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。」(マタ7:13) しかし、感謝しましょう。「彼らが聞き入れようと、…… 拒もうとも」(v.5)、「わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」(イザ40:8)からです。

カトリック教会は宣言します。「それ故に、教会の教えも、キリスト信者の信仰そのものも、聖書によって養われ、規定される。」(神の啓示に関する教義憲章 21) 「公会議は、すべてのキリスト信者に、…… 聖書を学ぶよう、特別に強く勧める。」(同 24) キリストに賛美。そして神に感謝。

ハレルヤ、アーメン。

7月12日 年間第15主日

アモ 7:12~15 エフェ 1:3~14 マコ 6:7~13

1. マコ

イエスによる十二人の派遣の物語りは、言うまでもなく、原始教会における使徒たちの宣教活動の指針となつたに違いありません。そして、それが使徒後の教会にも受け継がれるように、福音書の中に大切に保存されました。ですから私たちは、現代における教会の宣教活動の指針としても、この物語りに耳を傾けるのです。

w.12-13「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。」

しばしば誤解されるように、第一に、これは人々に“正しい人間になりなさい”という道徳を教えたのではなく、また第二に、医療奉仕によって多くの苦しんでいる人々を助けたということでもありません。イエスの場合と同様に、使徒たちの宣教にも、奇跡やいやしという不思議な業が伴ったことを聖書は語っています。そしてそれらは、神の国が近づいたという終末の時のしるしでありました。

「悔い改めさせるために宣教した」という新共同訳聖書の率直な翻訳は、たいへん好感の持てるものです。教会の宣教とは、それを聞く人々の悔い改めを目的としているのだという、もっとも基本的な事実を、私たち現代のキリスト者は再確認する必要があります。そしてその宣教は、悔い改めて信じる者に罪の赦しと永遠の命を与える神の力である、という確証を聖書から読み取ることが大切です(ロマ 1:16 参照)。

現代の教会は、また現代のキリスト者である私たち一人一人は、この主イエスに起源する宣教命令を自分たちへの命令として理解し、受け継いでいるでしょうか。もしかすると、全く似て非なる“良いお話”や“良い世の中作り”で、自己満足してしまっている可能性が大いにあるのです。

2. エフェ

特に新約聖書において“悔い改める”という語は主に、対人関係についてではなくて、神と人との関係において用いられています。それは福音を信じて救われること、「(キリストの)血によって贖われ、罪を赦され」(v.7)ること、そして「御国を受け継ぐための保証」である聖霊をうける(w.13-14)という実を結ぶはずのものとして語られています。

人は福音を聞いて正しく悔い改めるか否かによって、救いにも至り、あるいは滅びにも至るのです。「斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」(マタ 3:10、ルカ 6:43-45 参照) 福音書に記録されているイエスの言葉、「悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)は、決してあのとときだけの特殊な台詞ではなくて、世の終わりまで有効な神のことはなのです(マタ 28:18-20)。

この世においては、人がどの宗教を信じて、あるいは信じなくても、そういうことには関係なしに、“みんなが幸せになるように”とか“世界が平和になるように”という目標を掲げて、活動することが出来ます。それよりもむしろ、各種の宗教や教派の存在は、人々が、あるいは民族や国家が、互いに対立して争う動機を提供しているようにも見えます。事実キリスト教の歴史を振り返って見ても、しばしば時の支配者や権力者はキリスト教の諸派や勢力を利用しようとし、教会の側でもこの世の支配者たちを自らの益のために利用して来ました。ですからカトリック教会も含めてキリスト教諸派の間の争いは、事実上皇帝や国王たちの間の争いであったり、彼らと教皇との間の支配権闘争であったと言っても過言ではありません。

それにもかかわらず、神は私たちキリスト者を“闇の力”(コロ 1:13) “あらゆる不法”(テト 2:14) “悪魔の働き”(Iヨハ 3:8)から救い出して、悔い改めさせるための宣教へと召してくださいました。使徒パウロはテサロニケの信徒に書き送って、「主の言葉(福音)があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡った」(Iテサ 1:8)と、神に感謝しています。

現代においても、悔い改めさせるための宣教とは、それによって私たちが「秘められた計画」(v.9)を理解し、信じて「約束されたものの相続者」(v.11)とされ、その結果「キリストに希望を置いて、…… 神の栄光をたたえる」(v.12)こと以外ではあり得ないのです。

3. アモ

アモスは南王国に生まれ、北王国の聖所ベテルで、恐らく短期間だけ活動した預言者でした。彼は相当の知識人であったようですが、宗教の専門家ではなく、まして職業的預言者でもありませんでした。

v.15 「主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、“行って、わが民イスラエルに預言せよ”と言われた。」

アモスにおいて初めて神の民イスラエルは、神の裁きの対象、“悔い改めさせる宣教”の対象となったのでした。(3:2) 現代のカトリック教会においても、このような宣教理解は、教導職に限らずすべての信者のものであるべきなのです(教会憲章 33 参照)。

「今こそ、神の家から裁きが始まる時です」(Iペト 4:17)とは換言すれば、私たちキリスト者にこそ、悔い改めて御国の相続者とされる恵みが、先ず提供されているということです。復活されたキリストは、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがた(の宣教)と共にいる」(マタ 28:20)とっておられるのですから。

ハレルヤ、アーメン。

7月19日 年間第16主日

エレ 23:1~6 エフェ 2:13~18 マコ 6:30~34

1. マコ

v.30 「さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。」

使徒という呼び名は、ヘブライ語に由来する“遣わされた者”(ヨハ 13:16)という意味なのですが、既にマルコ福音書が書かれた頃には、明らかに原始教会における12使徒、あるいはそれにパウロと主の兄弟ヤコブ(ガラ 1:19)を加えた特別な役務者たち、いわゆる“キリストの使徒”(1テサ 2:7)を指していました。彼らは復活のキリストによって召され、神の福音を委ねられた人々であり(ロマ 1:1)、それ故に彼らを遣わされた方に常にその働きの経過を報告する責任を与えられていました。

ですから私たちは、使徒の後継者である現代の司教たちをも、その委ねられた務めの故にキリストへの報告の責任を担わされた人々として理解しましょう。

v.34 「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」

イエスが群衆を憐れまれた理由は、“飼い主のいない羊のような有様”であったと述べられていますが、これは旧約聖書に由来する表現で(民 17:17、エゼ 34:5)、神の救いの恵みから遠ざけられている有様のことです。イエスはいろんなことをたくさん教えられたのではなくて、ただ一つのこと、すなわち“神の国の秘密”についていろいろと教え始められたと理解しましょう(4:10-34 参照)。実に使徒たちの務めは、この“神の国の秘密”を教えることでありました。

新共同訳聖書では、ミステーリオンというギリシア語を含む句が、“神の国の秘密”(4:11)、“隠されていた神秘”(1コリ 2:7)、“福音の神秘”(エフェ 6:19)、“秘められた計画”(ロマ 16:25、エフェ 3:3)などと翻訳されていますし、カトリック教会の七つの“秘跡”も同じ語に起源しています。

それでは、使徒たちの宣教する福音を通してキリストが啓示されたミステーリオン(ロマ 16:25、エフェ 1:9、3:3)とは、どのようなものなのでしょうか。

2. エフェ

v.14 「実に、キリストはわたしたちの平和であります。」

この“平和”という言葉は、かつては互いに敵対していたユダヤ人と異邦人が仲良くなることだと、単純に考えてはなりません。異邦人という呼び名は、ユダヤ人の理解ではいわゆる“異邦人のような罪人”(ガラ 2:15)という蔑称であって、「キリストと関わりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きている」(2:12)人々のことでした。

ユダヤ人と異邦人が互いに敵であったということではなくて、異邦人は神に対して“敵であった”(ロマ5:10)にもかかわらず、今やキリストの血によって(神に)近い者となった(v.13)ということが、最も重要な点なのです。それゆえ、ユダヤ人と異邦人の両者を共に神と和解させて一つの体にくださったキリストは、私たちの平和なのです。その平和は先ず第一に“神との間の平和”であり、その結果として“両方の者”(v.18)の間の敵意という隔ての壁も取り壊されるのです(v.14)。

この“両方の者”が共に同じ神の国の約束にあずかる者となるということが、ミステリーオン、すなわち“秘められた計画”であり、現代においても、このミステリーオンの宣教こそが、教会に委ねられた使徒的使命であることを理解しなければなりません。そしてこの使徒的使命は、教導職と共に、すべての信者にも委ねられているものなのです(教会憲章33参照)。

3. エレ

v.3 「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる。」

v.6 「彼の名は、“主は我らの正義”と呼ばれる。」

ミステリーオンは“神の”計画であって、決して人間の事業ではありません。「その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です」(コロ1:27)。キリストは私たち教会にとって「義と聖と贖いとなられたのです」(1コリ1:30)。

ですから現代のキリスト者にとっても、「わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。……大切なのは、新しく創造されることです。……神のイスラエル(すなわち教会)の上に平和と憐れみがあるように。」(ガラ6:14-16)

ハレルヤ、アーメン。

7月26日 年間第17主日

王下 4:42~44 エフェ 4:1~6 ヨハ 6:1~15

1. ヨハ

v.14 「そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、“まさにこの人こそ、世に来られる預言者である”と言った。」

“しるし”は、一方では人々に、イエス・キリストへの信仰を目覚めさせるものとして語られています(2:11,23)、他方では、人々の困窮に助けを与えたり満足させたりするものとしても描かれています(6:2,26)。前者はキリストの受肉と死と復活の意味を正しく理解することであり、後者はキリストが与える救いに対する外的な解釈であるというのが、ヨハネ福音書の主張です。

この方こそは“来るべき方”(マタ 11:3)であるという理解を人々の心に起こしたとき、この日の出来事はまさに“しるし”でありました。しかしこの来るべき方を、“イスラエルのために国を立て直してくださる”(使 1:6 “ユダヤ人の王”(18:33)にしようという群衆の計画を、イエスは拒否されました(v.15、マタ 4:8-10 参照)。

v.4 「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。」

すでに共観福音書に伝えられている群衆への給食の奇跡物語り(マコ 6:35-44, 8:1-9)の伝承に、ヨハネはこの句を挿入しました。恐らくそれは、ミサにおける感謝の典礼を思い起こすことが、この6章全体を理解する鍵であるということを説明するためであったと思われる。なぜなら感謝の典礼も、あの最後の晩餐も、ユダヤ人の祭りである過越祭を背景にしているからです。

ただしここでヨハネは、決してミサ聖祭という儀式そのものの神学的な説明をしようとしているのではありません。そうではなくて、神が御子によって私たちに与えてくださった救いへの信仰が(ガラ 2:19-20)、そして“秘められた計画”(エフェ 3:3-9)を確信することが、ミサにおける感謝の典礼の欠くことの出来ない要件であると主張しているのです。

実に信仰とは、未だ目に見えないものを待ち望んで(ロマ 8:23-25)確信することであり(ヘブ 11:1)、そして救い主イエス・キリストは、私たちの信仰の対象であると共に、またその信仰を私たちに与えてくださる方なので(ヘブ 12:2)。

2. エフェ

v.1 「神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、…… なさい。」

私たちが歩んで来た我が国のキリスト教を振り返って見て、信仰というものを“神から招かれた”という形で理解して来たであろうか、はなはだ疑問に思えます。“来るべき神の国”という“一つの希望にあずかるようにと招かれている”(v.4)との聖書の言葉が、教会人の意識の中でほとんど忘れ去られていたというの

が事実だからです。

使徒パウロは、古くからの“信仰”という表現と並んで、これを“希望”という語で説明して言いました。「わたしたちは、このような希望によって救われているのです」(ロマ8:24)と。

ミサにおけることばの典礼は、聖書の朗読と説教からなっています。第二バチカン公会議はその典礼憲章(51-52)で、この聖書朗読と説教を、感謝の典礼と並んでミサの中心に置きました。ですから現在カトリックの御聖堂では、信者席と区別して内陣に、司祭席と聖書朗読台と祭壇という三つの中心が配置されています。決して祭壇だけが中心で、司祭席と朗読台は従であると考えてはならないのです(土屋吉正／ミサがわかる p.65、ミサ典礼書の総則 97 参照)。

教会が抱いている希望について説明すること(1ペテ3:15)こそは、司祭による説教の主要な役目であることを、再確認しようではありませんか。その希望について、私たちは今朝に続く四週の主日のミサで、ヨハネ福音書6章から学ぶことになっています。

3. 王下

ヨハネ福音書は群衆への給食の奇跡物語りを述べるに際して、恐らくこの王下の記事を思い起こしたのでしょう。大麦のパン(v.42)と説明したのはそのためであり、共観福音書には存在しない少年の登場も、王下4:38の“従者”からの連想であろうと思われます。

「主の言葉のとおり」(v.44)とあるように、預言者の仲間百人を満腹させたのは、援助のパンを持って来た一人の男(v.42)の能力でも、神の人エリシャの能力でもありませんでした。そのように現在も、ミサの祭儀はキリストの行為であり(ミサ典礼書の総則1)、そこで信者の霊的いけにえは、司祭の奉仕を通して唯一の仲介者キリストのいけにえと一つに結ばれるのです(同5)。

v.43 「どうしてこれを百人の人々に分け与えることができますよう。」

教会が、あるいはキリスト信者が、この世界を救うのではありません。そうではなくて、福音こそは信じる者すべてに救いをもたらす“神の力”(ロマ1:16)です。神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。なぜなら、神の愚かさは人よりも賢いからです(1コリ1:21,25)。

ハレルヤ、アーメン。